

海と漁の体験研究所、大浦佳代です。

4月20日～23日に、さまざまご縁があり釜石と宮古の海辺を歩いてきました。見聞きしたことはほんのわずかですが、情報として少しお話をさせていただきます。

=====

全体的に強く感じたのは、同じ岩手県下どころか同じ市内でも、地域のありようや年齢層、地形などによって、被害の度合いも復興の道筋も、まったくばらばらだということ。漁協や行政の動きや危機感についてもしかりです。シロウト眼に見ても、均等な支援や補助、画一的な復興計画は実効性がないのでは、と思いました。

たとえば、釜石市には釜石東部、釜石湾、唐丹町の3漁協があり、すぐ北隣には大槌町漁協があります。大槌は津波被害が深刻で、漁村のコミュニティは内陸部への避難で離散した状況だそうです。一方、唐丹は地形的に比較的被害が小さく漁協の建物も機能を維持。釜石駅前のお土産センターでは、わずかですが唐丹産の新物ワカメが売られていました。また、組合員の構成も一様ではなく、唐丹は漁業依存度が高いけれど、湾漁協や東部は年金をもらいながらの高齢者の割合が高いなどの違いがあります。とはいえ、湾漁協の中でも地区によっては、白浜のように若手が多く活気のある純漁村もあります。

宮古市の場合も、震災後1か月半たってようやく理事会が開かれた組合もあれば、組合員の平均年齢が55歳とバリバリに若い漁協では、震災の1週間後には復興の方針が決まり、携帯電話がつながるやいなや、養殖資材や船外機の発注をかけまくったと聞きました。

=====

釜石市と釜石湾漁協は、横浜の環境NPOと10年来の交流があります。このNPOが横浜港内で環境活動として行っているワカメ栽培を支援したのが縁。毎年、横浜から釜石を訪ねる体験ツアーも行われています。

とくに交流の深い白浜地区は、釜石湾を抱く岬にあります。岩手県沿岸の漁業はたいていそうですが、家族経営のカキ・ホタテ、ワカメ・コンブの養殖、アワビ・ウニの磯漁が中心です。中でもアワビ漁には、ものすごい技術があります。箱メガネで海中をのぞき、長い竿先につけたカギで、なんと水深20mのアワビをとるのです。名人の域に達すると、わずかに届かない深さでは竿を岩に投げつけ、バウンドを利用してアワビをカギにひっかけるそうで…。もう神業というしかありません。ここは、そんな「海の民」の土地です。

今回、白浜は144世帯のうち35世帯が全壊し、今も約70人が避難生活を送っています。仮設住宅は地区内建設が決定したそうで、散り散りにならずにすんだとみなさん喜んでいました。地震直後、岬の道路が寸断され集落は孤立しました。食糧など物資が入ったのは1週間後、海上から船で届きました。道路復旧はさらにその数日後。お年寄りや持病のひとの薬を手に入れるため、若者が2人1組になり1日ばかりで歩いて町まで通ったそうです。

孤立していた間、食糧は各家から集め、全戸の女性が加入する漁協女性部が、行事のときのように「いつもどおり」当日の夕食から炊き出しを開始。男たちは「この際、生きるためには法律も何も関係ない」と、道路に置き去りにになっていたタンクローリーを集落に持ち込み燃料を確保。林道工事現場の重機を山から下ろして集落内に道路を開いたり、山水を避難所に引きこんだり。見事に自立した生活が営まれていたそうです。

=====

99%漁業で生活している白浜地区。津波は、美しい磯浜の風景も、漁船も各種養殖いかだも、個人の加工施設も、倉庫も漁協支所の建物も、一切合財をのみこみました。

「40年かけて築いたものをすべて失った。まだ現実とは思えない」と、アワビ漁名人のHさん(60)。しかし、「漁師は海でしか生きていかれぬのス」と、海に出られない毎日がもどかしそうです。毎朝起きるとすぐに浜に出て、しばらく海を眺めるそうです。

生活を支える漁業の復興は、何はともあれ漁船の確保から始まっています。白浜地区には、15人もの若手漁師がいます。この若手と60歳前後の中堅が団結。「漁協や行政に頼りっきりではなく、自分たちでも何かしなくては」と、支援の手を差し伸べた横浜のNPOを通じて、各地から中古船や船外機を求める流れができつつあります。

さらに、修理をすれば使えそうな船もあります。そこで修理技術と経験のあるSさんや、Hさんの長男で3人の子育て中のコウチャン(32)、ヤッチョさん(41)ら若手が、「自分たちで治せるものは治したい」と横浜のNPOに相談。先日、修理の工具、船体の原材料や薬品、発電機、手動クレーンなど一式を満載したNPOの車が横浜から到着。「これで1歩前に進める」と、出迎えた漁師たちは大喜び。まるで分厚い曇間から太陽の光が差し込んだような晴れやかな笑顔が、とても印象的でした。

例年6月からはウニ漁の解禁です。岸壁についていたウニをヤッチョさんが見つけて、ひと口。「おっ、大丈夫。重油くさくない、美味しいよ」とにっこり。

帰りにはなんと、わずかに残った貴重な塩蔵コンブを「どうしても」と、お土産に持たされました。自然相手に暮らすひとの強さ、温かさ、豊かさです…。

アワビ漁名人のHさんも「60歳になったがまだやれる」と、再出発の決意を固めていました。2人の息子とは別経営。奥さんと2人でゼロからの再出発です。どんな作業も夫婦一緒ですが、アワビ漁では船を操るのは奥さん。じつは女房あつての名人なのです。奥さんは「この30数年の苦労は何だったのか。もう年金暮らしていい」と弱気でしたが、Hさんに「オメ(お前)がいなかったらオレもやめるベサ。もう1回一緒にやるべし」と口説かれて「そんなこと初めていわれた…」と、あとはもうただ涙でした。

=====

漁協の強いリーダーシップで地域漁業の復興を目指しているのが、宮古市、重茂(おもえ)半島の13浜を統べる重茂漁協。組合員の平均年齢は55歳で、40歳以下の若い漁師がなんと94人もいます。津波被害はここでもやはり甚大でした。まず漁船。無事だったのは全部

合わせても 14 艘のみ。養殖や磯漁に使う小型船は、780 艘のうちたった 6 艘しか残っていません。「大津波はいつかまた来るだろう」と誰もが覚悟はしていたそうです。しかし今回の津波は予想の規模をはるかに超えていたといえます。

若手が多い重茂では、「1 日も早く道筋をつけないと後継者層が流出してしまう」という危機感に背中をあおられるようにして、復興を急いでいるように感じました。「長くても 3 年以内に漁業で暮らせる見通しをつける」というのが、漁協自らがはじき出した期限です。立て直しの初動は、船外機と資材の確保でした。今後は修理した船による共同作業で、1 日も早い漁業の再開を目指すといえます。

「国が打ち出した“漁村の集約”の発想など、とんでもない。小さい漁村があるからこそ、この地域の漁業は成り立っているんです」。漁協の伊藤組合長はそう強く訴えていました。

＝＝＝＝＝＝＝＝

どの地域でも、アワビなどの生物資源と、海の環境が不安材料だと聞きました。海水の透明度はまだかなり低いといえます。壊れた防波堤や岸壁など、港湾の復旧も必要だし、海底のがれき除去も大きな課題です。県によると、海底のがれき除去で国庫補助の対象になるのは、漁港区域のみだそうです。漁場については県が漁業者を雇用して行うしかないが、県も財政難で現状は厳しい、という話でした。

「水揚げの半分はがれきです。電柱や車など“大物”も多いですよ」。こう話すのは、宮古市で底引き網漁を営む、(株)金澤漁業の金澤俊明社長(56)。

同社は、319 トンの遠洋マグロはえ縄船 2 艘が南太平洋で操業しているほか、75 トンの 2 艘引き底びき網漁(トロール)を、岩手県の沿岸で行っています。地震発生時、底びき網の船はちょうど宮古の魚市場で水揚げ中だったそうですが、魚をほったらかしにしてすぐさま沖合に避難。船も乗組員 20 人もすべて無事でした。社長業は陸の仕事で、会議で東京にいた金澤さん。「底びき漁船は 1 艘が 4 億 5 千万。被災していたら廃業した」といいます。震災後の初出漁は、県北・久慈の魚市場再開に合わせ、4 月 5 日でした。その後 11 日に宮古の魚市場も復旧したため、本格的に漁を再開しました。ところが、「宮古の沖合で網を引き始めたら、がれきが多くて驚いた。網の修理が大変」という事態に直面しました。

網を引くのは、水深 200m~700m。200m の場所ではがれきが多く入るそうで、1 日の操業で 3、4 トン。すべて持ち帰っています。国の予算で海底清掃が組まれましたが、詳しく聞いてみると、乗組員にいくらかの日当と燃油代半額の補助のみ。しかも魚の水揚げは禁止。「漁師をばかにしている」と、この話は蹴って、赤字だけでも毎日操業しているそうです。現在、魚価は震災前の半額以下。しかもかまぼこなどの加工業が被災して製造を中止しているため、原料のゲンゲやカジカなどの魚類は、キロ 1 円という“破格の”浜値です。

「でも、漁師が魚をとってこないことには、漁業に関連して食っている宮古の町の復興はない。ここが漁師の心意気の見せどころってやつでしょう！」と、オトコマエな発言。かたわらで奥さんが「まったく」と苦笑いしながらも、惚れぼれと見守っていました。

＝＝＝＝＝＝＝＝

本当にわずかな見聞です。それでも地域の数だけ、家族の数だけ、事情はさまざまでした。国や県の補助制度が確定していない現段階では、漁協など組織も各漁家も、再投資の計画は模様見の段階かもしれません。しかし、どの地域であれ、せっかくやる気のある若い世代が漁業の道を選び続けられる仕組みが、本当に求められていると思いました。

子育て世代の若い漁師さんたちからは、共同作業の配分について不安の声も聞こえました。復旧期の今はわき目もふらずに必死でも、1年たったときにはどうなのか。重茂漁協の「リミットは3年」という必死の声もうなずけます。

遠く離れているけれど、わたし(たち)には何ができるのでしょうか。やはり、ささやかだけれど縁のある個人や地域に「応援している」と、地道に長く声をかけ続けることが大事なのではないかなと、思いました。小さな船1艘の支援がどれだけ励みになるかを、釜石の白浜では目の当たりにしました。

小さな漁村の夫婦愛、家族愛、そして海への愛着が、日本の海洋文化を、わたしたちの食を支えてくれていることを、今更ながら、いとおしくありがたく感じています。

ご力添えいただいた、すべての方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。